

麻生すこやか通信

VOL. 32

医療法人 札幌麻生脳神経外科病院 広報誌 2017年7月

イノベーション さらなる高みを目指して 院長 飛驒 一利

5月に中国の臨沂(リンイー)市での脳神経外科の学会で特別講演を頼まれ、出かけてきました。臨沂は山東省では一番大きな街で人口1100万人ほどいるそうです。学会では「頸椎症と頸椎後縦靱帯骨化症の外科治療」と「脊髄腫瘍の手術」の話をしてきました。大変熱心に聴いていただき、沢山の質問もありました。中国では脊椎の手術は整形外科であることが多く、頸椎の前方手術はあまり普及していないようです。そこで8月末から王先生が3ヵ月ほど手術の勉強のために来ることになりました。今年の3月まで2年間、愛媛大学脳神経外科から重川先生が来てましたが、4月から富山大学から山本先生が研修に来てくれています。2月から北大から笹森先生が来てくれました。笹森先生は痛みの専門家で優しい先生です。さらに4月からカナダ留学を終えた杉山先生が赴任してくれました。杉山先生は北大血管障害



中国の先生方から空港で花束をもらう

を将来背負うと言われている優秀な先生です。それぞれの先生の紹介は次ページにありますが、どうぞよろしくお願いします。

一つ嬉しいニュースがあります。

昨年の札幌麻生脳神経外科病院の手術件数は619件でしたが、北大脑神経外科の関連病院の中で1番となった



AO Spine Advanced Symposium Sapporoでの参加者と一緒に

ことです。2012年の当院の手術件数は486件でしたが、その後順調に右肩上がりが増加しています。患者さま、そして地域の病院からの紹介患者さまが増えているためと思います。

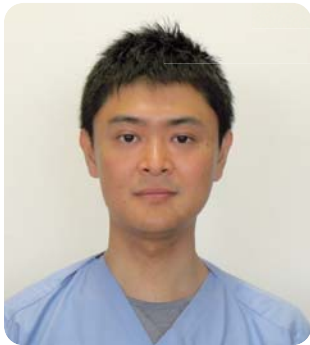
7月1日にAO Spine Advanced Symposium Sapporoを北海道医療センターの伊東学先生と共に主催しました。全国から50余人の脊椎脊髄のスペシャリストが札幌に集まり、今回は「サルベージ手術」というテーマで行いました。サルベージ手術とは1回目の手術が駄目だった場合に行う、2回目以降の手術を意味します。違うアプローチが必要だったり、癒着等もあり、1度目の倍どころか、3倍、5倍と大変なのが、サルベージ手術です。好き好んでする医師はいませんが、適応、手術の考え方・コツなどを討論しましたが、私も脊髄腫瘍、癒着性クモ膜炎、特殊な手術症例などを発表しました。

札幌麻生脳神経外科病院は6月から少しずつではありますが、訪問看護も始めました。地域医療の連携も多くの病院、医院の先生方・スタッフと行っています。将来は訪問看護をさらに充実し、訪問リハビリ等も出来たらと考えています。新しい病院の形を常に求めて行こうと思っています。患者さまの信頼により答える病院を目指していきたいと思っています。



中国の学会場での記念写真

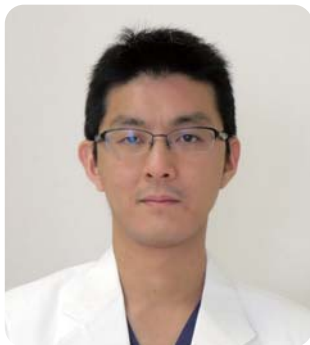
ドクターご紹介



医師 笹森 徹

2月13日付で北大病院より異動して参りました、笹森徹です。昭和54年生まれの38歳、女2人、男1人、3人の父親です。札幌麻生脳神経外科病院では、平成23年10月からの約1年半お世話になり、今回が2度目の勤務となります。再び、麻生のスタッフの皆様方と一緒に仕事ができることを、心から楽しみにしています。専門は、脊椎脊髄外科および機能外科で、特に、痛みの治療に興味があります。最近、矢野副院長の勧めもあり、ジョギングを始めました。健康のためだけではなく、診療、手術、日常生活で通用する“あきらめない”根性が身に着けばよいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

札幌市出身。2004年旭川医科大学医学部を卒業し、北海道大学脳神経外科へ入局。2010年脳神経外科専門医取得。2014年北海道大学大学院博士課程で学位を取得。これまで北大病院および関連病院において臨床研修を行い、北大病院脳神経外科助教を経て、2017年2月より当院勤務。脊椎脊髄疾患の診療を中心に、痛み、痙縮、不随意運動に対する機能外科の分野も担当する。
【認定医・専門医】日本脳神経外科学会専門医、日本脊髄外科学会認定医、日本定位・機能神経外科学会技術認定医、日本脳卒中学会専門医



医師 杉山 拓

本年4月より当院に赴任いたしました。直前まで、カナダ・カルガリー大学で術中MRI装置や手術ロボットneuroArm/SYMBISの開発などの「医工連携」プロジェクトに携わっていました。当院では、一人ひとりの患者さまに対して、ベストな医療を提供できるように心がけています。よろしくお願いいたします。

2003年筑波大学医学専門学群卒業。北海道大学医学部脳神経外科入局。その後同関連病院勤務。2011年北海道大学大学院、短期卒業、医学博士。2010～2015年手稲溪仁会病院脳神経外科。2015年～2017年カナダカルガリー大学。2017年4月より当院勤務。脳神経外科全般（特に脳血管障害の外科治療）を専門とする。【認定医・専門医】日本脳神経外科学会認定医、日本脳卒中学会認定脳卒中専門医【著書】「超」入門クリッピング・脳血行再建術



医師 山本 修輔

はじめまして、脳神経外科の山本修輔です。今年の4月に札幌麻生脳神経外科病院に赴任いたしました。私は富山県出身で、昨年度までは富山県で勤務しておりました。北海道で勤務・生活するのはこれが初めてですが、ようやく慣れてきたように思います。これから札幌市の脳外科医療に少しでも貢献できるよう、精進してまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

2013年 富山大学医学部卒業。その後、同大学脳神経外科入局。
同大学附属病院および富山県内の関連病院での勤務を経て、2017年4月より当院勤務。
趣味：ウインドサーフィン

診療日のご案内

平成29年9月30日(土)、12月16日(土)は外来診療いたします。
(※第2土曜日、もしくは第4土曜日が祝日で休診のため)



訪問看護室 主任看護師 多喜 美樹

訪問看護室

「こんにちは訪問看護です」

在宅部門訪問看護室が平成29年6月1日開設しました。
院内・外をつなぎ患者さまの在宅生活支援を強化する体制を作り、
地域と協業しながら継続看護で支援していきます。

昨年10月より開設準備を開始し、6月1日によりやく稼働することができました。緊張とともに、患者さまや病院内のスタッフからの期待、優しい配慮等、様々な思いを持ちながら、院内・院外の地域を渡りながら活動し始めています。すでに少しずつ地域の居宅支援事業所や地域包括支援センター、地域連携でお世話になっておりますクリニックや病院などにご挨拶に伺っているところですが、今後は利用者さまを通して更にも多くの方々と協業しながらの活動となります。しっかりとみなさまの要望に対応できるように成長したいと思っています。

訪問看護室で活動する職員は、私と本間智美看護師の2名でスタートしました。私は地域医療連携室担当も兼務していますが、訪問看護室開設にあたり業務のウエイトは訪問看護に置いている状況にあります。地域連携の一部を担うこともあり、活動の幅が広がった印象を持つようになりました。今後は、利用者さまの増加に合わせて、スタッフの増員等を調整しながら、組織強化に努めていきます。

当院は脳神経外科単科の病院として地域で医療活動を行ってまいりました。近年の地域包括ケアシステムの構築と推進により、「病院完結型」から「地域完結型」へ変遷する医療において、医療機関の機能分化・強化と連携、在宅医療の充実への対応が求められている中、地域の要望に対応するための課題もありました。在宅で継続した医療が必要な患者さまは、医療にまつわるケアが必要となります。そして温かい気持ちで行われるケアは「その方らしい生活ができる」ための特別な支援であり、当院の看護活動理念にある患者さまの「生活支援者」として社会に貢献していくこと…をあらためて念頭に置きながらの活動となりました。



「こんにちは訪問看護です」。この言葉から、利用者さまへの訪問看護活動が始まります。実際に利用者さまのご自宅に伺って訪問看護を提供できるまでには、準備が必要となりますが、場合によっては、緊急の調整によって速やかに開始する必要があります。多くの場合は、当院入院中から退院後の生活を見据えて病棟の看護チームと相談や調整を行いながら、時には入院中のケアにも参加しながら「顔の見える訪問看護」として安心感をもっていただけるよう活動していきます。また、外来通院中の患者さまに対しても、受診時の調整から訪問看護利用がスタートする場合もあります。外来看護師や外来担当医師からのすすめで在宅支援につながることもあります。看護師や医師だけではなく、リハビリセラピストやソーシャルワーカー、他部門との連携を生かし、ご家族からの相談に対応し、担当のケアマネージャーとの調整を行い、在宅生活を皆でサポートする体制を作りながら、実際の訪問看護につなげていきます。

現在活動開始から1か月余りが経過しました。院内・外を縦断・横断しながら、新しい出会いを大切に、新しい情報を吸収し学習しながら、札幌麻生脳神経外科病院の訪問看護師として生き生きと活動していきたいと思っています。地域の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。



日本ハムファイターズ 立石尚行さん講演

「勝つためには正しい指導が大切」

立石 尚行 (たていし なおゆき)

日本ハムファイターズ事業統括本部
コミュニティリレーション部
アカデミーグループ ディレクター

1970年5月14日生。千葉県習志野市出身。市立船橋高から社会人野球のNTT関東に入団。1998年日本ハムファイターズからドラフト3位指名を受け、28歳でプロ入り。2007年引退。通算成績は25勝19敗1S 7HP。現在は北海道日本ハムファイターズ・ベースボールアカデミーのコーチ(野球教室講師)も務める。右投げ右打ち。

2月15日、院内研修交流会にて元プロ野球選手の立石尚行さんが「勝つための目的と方法」をテーマに講演しました。立石さんはプロ2年目の2000年に9勝を上げましたが、その後しばらく満足のいく成績を収められなかった事に触れました。「コーチの指導方法は人によってバラバラで、Aコーチの言うことを聞くとBコーチが怒る。Bコーチの言うことを聞くとAコーチが怒る。チーム成績は毎年最下位争いをしている状態で、野球をすることがつらかった」と振り返りました。そんな環境を一掃したのが、2003年に就任したヒルマン監督です。「日本では自分の野球論を選手に植え付けるのがコーチ論、という考え方がありました。ヒルマン監督は、選手をどうやったら生かせるか、どう伸ばせるかを徹底的に考え、マニュアルを明確にします。選手は何を求めているのか。何が必要なのか。どういう練習が、どういう言葉が必要なのか。どういう環境で生きてきたのか。どういう指導者と巡り合ってきたのか。この細かさがヒルマン野球の特

徴です。コーチ、選手、スタッフと対話を重ね、最良の指導方法を導きます。選手が失敗した事を怒った方が指導者らしく見える、という旧態依然の雰囲気チームからなくなりました。『選手の成功がコーチの成功』という一体感がチーム内に生まれ、コーチと選手は信頼関係で結ばれていきました。いかに選手の能力を引き出すか、それは日頃の行動の観察や対話から生まれるもので、『指導者らしさ』はまったく必要ありません。また、根性論を排除した科学的なトレーニングの必要性も指摘しました。「身体のどこを鍛え、どこに筋肉をつけたらいいか、筋トレから食事まで、野球以外にも選手の全てをチームが管理しています。でも窮屈にならないよう、髪形やヒゲは自由です」ヒルマン監督のもと立石さんは、2005年に5勝1敗7ホールドポイントの好成績を残し、再び輝く事ができたのです。最後に「勝つためには全員が同じ目的を持つことと、正しい指導が欠かせない」と強調しました。こうした表向きの話から、ファイターズの裏話まで、立石さんの明るい人柄が伝わる熱い講演でした。

編集後記

当院の土曜診療は第2・第4土曜ですが、9月と12月は祝日と重なりますので、9月30日(土)と12月16日(土)は診療いたします。患者さまにはご不便をおかけしていますが、救急の患者さまは365日24時間対応しています。札幌麻生脳神経外科病院は、これからもずっと地域と共に歩み続けます。患者さまの笑顔が私たちの宝物です。

医療法人 札幌麻生脳神経外科病院

〒065-0022 札幌市東区北22条東1丁目1-40
TEL 011-731-2321(代表) FAX 011-731-0559
ホームページ <http://www.azabunougeka.or.jp>

交通アクセス

- 地下鉄:南北線 北24条駅下車
(2番・3番出口から徒歩約7分)
- 中央バス:「北21東1」下車、徒歩約2分
- 中央バス:「北24東1」下車、徒歩約2分



携帯用サイト



当院への バス路線 中央バス

屯田線 02・新琴似線 09・あいの里・篠路線 22
篠路線前団地線 36・ひまわり団地線 28
花川南団地線 14・花畔団地線 16・元町線 東70
石狩線・石狩線(トーマン団地行)・札厚線・札厚線(特急)

※お間違いないようご注意ください

- 往路と復路とで停留所の異なる路線があります。
新琴似線 09・花川南団地線 14・花畔団地線 16・石狩線・石狩線(トーマン団地行)
- バス停「北24条東1丁目」は旧石狩街道・石狩街道・宮の森北24条通の3カ所あります。